

# Fast life, slow life

村越 真

いつもと違う人たちと接してみると、新しい発見がある。僕たちが当たり前に持っている知識や技術すら、新鮮なものに思えてくる。

## 何のためのトレーニング？

前号で紹介したとおり、僕は、暮れ  
の合宿で怪我をし、28日に太腿を7  
針縫った。怪我4日目であった31日  
には、びっこをひきながらもほぼ歩き  
まわることができるようになった。そ  
の意味では順調な回復だったが、アス  
リートとしては必ずしも順調とは言え  
なかった。3が日では、ひざはまだ9  
0度以下には曲がらなかったし、走る  
ことはもちろんままならなかった。2  
日に軽くジョグをしようとしたら、や  
はり痛みが出る。かつての教え子で、  
今は理学療法士をしている女性に電話  
できいたら、「痛みのあるうちは走っ  
ちゃだめです。」と言われて、10日目  
くらいまでは我慢することに決めた。  
その間、他の部位の筋トレをした。怪  
我した大腿部は、130度くらいに曲  
げた状態では負荷をかけても大丈夫だ  
ったので、等尺性の負荷をかけて、少  
しでも筋力を衰えないようにした。

しかし、自分はいったい何のために  
まだトレーニングを続けているのだろ  
うかという疑問が時折頭をもたげてく  
る。

## 10日ぶりに味わうランニング の心地よさ

1月5日は午前中静大会の準備に  
参加した後、午後は東京で弟の結婚式  
に出席。翌日の大会にあわせて、夜静  
岡まで帰ってくる。

大会当日は、競技上のミスはなかつ  
たが、ウィンブレ輸送が滞ったり、速  
報が中断したりといったミスが出た。  
学生の経験の度合いも、パワーも年々

低下している。そのような状況下では  
よくやったと評価できるが、質の高い  
大会を効率よく運営する方法論は、今  
や一大学クラブの問題ではなく、オリ  
エンテーリング界全体で考えなければ  
ならない問題だろう。



弟の結婚式にて

今日は走ると決めていたので、運営か  
ら帰ってきて家の周りを走る。4kmほ  
どゆっくりジョグするが、幸いなこと  
に痛みは出なかった。久しぶりのラン  
ニングが心地よい。目指す大会がない  
としても、走って気持ちよいと思える  
状態に身体をおいておきたいと思った。

## 普及こそ、焦眉の課題

JOA普及教育委員会で、東京へ。  
今後の普及プランの作成について、初  
回の意見交換を行う。メイン・スポン  
サーである森永の撤退、公認大会の参  
加者減少など、オリエンテーリングを  
とりまく環境は厳しい。大学クラブの  
加盟員も減少し、西日本大会の参加者  
も300人を割り込んでいる。もちろん、  
西だけでなく、埼玉の大会ですら1000  
人を集められなくなっている。普及の  
問題に組織として取り組んでこなかっ  
たのだから、当然といえば当然なのだ  
が。

普及の問題は、今もっともオリエン  
テーリング界が真剣に取り組まなけれ  
ばならない問題である。エリートに注  
目を集めることも重要だ。しかし、見

える魅力の乏しいオリエンテーリング  
には、見る楽しみを知るオリエンティア  
の存在は欠かせない。その意味でも、  
オリエンティア人口を増やすことは重  
要なことなのである。なにより、これ  
だけ魅力のあるスポーツに触れる人の  
数が増えないというのは、寂しいこと  
ではないだろうか。

9日は、IOFの理事会のため、ヘル  
シンキに出発。フィンランド航空の  
直行便だと、ヘルシンキまでたったの9  
時間。午後もそれほど遅くない時刻に  
着くので、ホテルに落ち着いて、ジョ  
ギングをして、軽い夕食をとって、ま  
だ午後8時。日本時間にすると午前3  
時なので、そのまま寝てしまう。理事  
会での渡航はただか3日くらいなの  
で、完全に現地時間に合わせないで、3  
時間くらいの時差を保ったままを心が  
ける。夜は8時すぎには寝て、朝は4  
時ごろ起きる。朝ご飯前に、かなり仕  
事ができるので得した気分だ。

翌10日は、完全にフリー。一日中ホ  
テルの部屋でワープロ仕事はかどる。  
これで、夕方のランニングが雪の中じ  
ゃなければ言うこと無しなんだけどな。  
IOFの本部がニースかモナコあたりに  
あったらありがたいのに！

11-12日は、朝から夕方までみっちり  
理事会。今回の大きな話題は、ワール  
ドカップのプロモーション。財源難は  
IOFも同じで、どうしたら大口スポン  
サーが獲得できるか？それをフィンラ  
ンドのコンサルティング会社に企画さ  
せていたのだ。「グリーン・グラン・プ  
リ」つまり森の中での、過酷な戦い。  
そして「ランニング・イズ・ノット・  
エブリシング」。他のスポーツとの差異  
化を最大限図ろうというのだ。北欧の  
文化の中に身をおいていない僕には、  
このようなコンセプトが企業や一般社  
会にアピールするものなのかどうかは、  
今一つ正確な評価ができない。

今回は、議事が少なかったので、「特別なタベ」を準備したと、事務局アシスタントのピリタが言う。理事たちは、「O シューズはいるのか?」「ウェアは用意した方がいいのか?」と興味津々。彼女たちが連れていってくれたのは、アイスホッケーのアリーナだった。しかも、リンクに面した2階席で、ディナーが取れる。ちなみに、フィンランドでは、サウナに入りながらホッケーの試合が見られるところもあるそう。

実際に試合が始まると食事どころではない、そこは給仕する方も心得ていて、ハーフタイムに手際よく料理を運んでくる。またハーフタイムには、観客による余興や、子どもたちによるPK戦があったりして、見せる工夫が随所にある。これ見て、オリエンテーリングがメディアと観客に注目させるアイディアを出せてことかな?

理事会自体は、ここ2年間ではもっともルーチン的で、刺激的な議題はなかった。2000年のIOFコングレス時の選手とIOFの対立も、エリート・イベント・プログラムの確立や世界選手権の毎年開催で一段落。これからはこの基盤をどう固めるか? また底辺をどう拡大していくかといったことが重要な課題になってくるのだろう。普及の重要性が高くなる点は、IOFも変わらないのだ。

## 人々の幸福へ

帰国便は、ラッキーなことに横4席が空席で、横になってぐっすり眠ることができた。気づいたときには、もう着陸1時間半前にサーブされる朝食の時間だった。家に帰る途中、同僚が主宰しているNPOのスポーツクラブの設立一周年パーティーに出席した。県の生涯スポーツ課課長を始め、80人近い人が参加する立派なパーティだった。大学での活動はどちらかというとぱっとしない彼だが、こうして長年の理想を現実の形にするための地道な努力を続けてきたのだ。学校時代はどちらかというと体育が苦手だった女性がサッカークラブで生き生きと活躍していたり、大学ではやる気の感じられない大

学院生が、このクラブでは喜々としてコーチ役を務め、子どもたちからも慕われているのを見ると、スポーツの持つ潜在的な力の大きさが感じられる。たとえ、マイナーな人たちのものであっても、このような幸福に貢献することが、これからのスポーツのあるべき姿だろう。

## 時にはオリエンテーリングを離れて

その後の3週末、僕はオリエンテーリングとほとんど縁のない生活を送った。トレーニングはいまだ順調とは言えず、練習量を増やすとどこかに痛みが発生することの繰り返しだった。トレーニングで強くなっているという実感が乏しい。以前ならキロ4分は切っているという感覚で走っていても、実際にタイムを見てみると4分30秒を切るのがやっとだ。今は、こういう状態とうまく折り合いをつけることも、

競技者として取り組まなければならない課題の一つなのだろう。それでも、スピードトレーニングをすると、少しずつからだのキレは戻ってくる。焦る気持ちにさえならなければ、それもまた楽しいものだ。

2月10日には、利佳ちゃんとその同僚の内田さんと、日和田山でGPSの利用実験を、また11日にはテレビの取材で方向音痴の人たちと一緒に街を歩いた。収録後、路地裏のエスニック料理屋で食事をしようと誘うと、彼女たちは嬉しそうにこういった。「私たち、自分たちのメンバーだけだと駅を離れられないんです」。二日間とも、普段接する人とは違う種類の人たちとの空間移動体験は新鮮であった。どんな形であれ、僕たちが当たり前のように使いこなしている技術を必要としている人たちがいる。そうした人たちとの接点は、もっともっと大事にすべきものだ  
ㇿ



全日本方向音痴の皆さんと。方向音痴というだけで、互いにすぐ仲良くなれる彼らの関係には、オリエンテーリングが好きだというだけで仲良くなれる自分たちに共通するものを感じた。

GPSは、本当に山で役に立つのかを実験中の内田さん。

どんな道具にもマニュアルには出ていない使い方、マニュアルでは解決できないトラブルが発生する。実験は、それを確認するいい機会であった。

